

## 黒一色彩バウム二枚法の意義

名 島 潤 慈

### Significance of the Black-Color Tree Test

Junji NAJIMA

(Received September 2, 1996)

Traditionally, trees in the Tree Test (der Baumtest) have been drawn with a pencil. Hence it follows that the conventional Tree Test is the Black Tree Test. However, this has a serious defect because of a lack of color. Needless to say, color has a close relationship with feelings or emotions. It is very difficult for the Black Tree Test to estimate the subjects' function and mode of affection. Therefore, since reading the paper of Fodor & Kendel (1966) entitled "*Vergleichende Beobachtungen von schwarzen und farbigen Baumzeichnungen bei psychotischen Patienten : Ein Beitrag zur objektiven Untersuchung der Affektivität bei Psychotikern*", I have conducted the Black-Color Tree Test using a pencil and twelve color pencils as the medium of expression in individual examinations for over 20 years. In the paper, I discuss the significance of the Black-Color Tree Test.

**Key words :** Baumtest, Tree Test, Black-Color Tree Test

#### I 本稿のねらい

Baumtest は、英語圏では tree test ないし tree-drawing test と言う。一方、日本では、バウムテストないし樹木画テストと言うが、本稿では表記をバウムテストに統一したい。このバウムテストを考案したのはスイスの職業コンサルタントの Emil Jucker であるが、普及させたのは同じくスイスの心理学者の Karl Koch (1906-1958) である。Karl Koch (英語名は Charles Koch) がドイツ語版の *Der Baumtest* を出版したのが 1949 年、英語版の *The Tree Test* を出版したのが 1952 年である。

ところで、バウムを描く用具は伝統的に鉛筆が用いられている。つまり、鉛筆一本による黒色バウム一枚法である。鉛筆は、Koch (1952) は柔らかい鉛筆、林ら (1970) は 4B の鉛筆を用いているが、どちらにしても鉛筆のみでバウムを描いてもらう訳である。[日本のバウムテストのほとんどは、林らのやり方にしたがって 4B の鉛筆を使用している。なお、バウムテストではないが、樹木画の入っている S-HTP 法 (Synthetic House-Tree-Person) (三上, 1995) でも鉛筆 (HB) のみである。]

しかしながら、鉛筆のみでバウムテストを行った場合、そこには一つの限界があるように思える。それは、鉛筆という黒一色しか存在しないため、色彩と密接な関係を有している感情・情動がうまくとらえられないことである。従来の鉛筆バウムでは、被検者の感情・情動を推測するには、枝のふくらみ・幹の輪郭の不連続線・空間象徴といった「形」のみに頼らざるをえない。これでは不十分であろう。

例えば、今ここに二人の被検者 (ないしクライアント) がいて、彼らが木の幹を塗りつぶした

とすると、鉛筆のみでは、濃淡の違いはあるにせよ、どちらも黒一色となって区別がつかない。しかし、ここで色鉛筆を導入して、一人は茶色で幹を塗りつぶし、もう一人は紫色で幹を塗りつぶしたとする。この場合、前者は自然に沿った色彩であるが、後者は逸脱した色の使い方をしていいる。意味的には、前者は自然な感情の流れを、後者は何らかの感情障害ないし現実吟味力の障害を意味しよう。このように、バウムテストに色彩を導入することによって、従来の鉛筆バウムでは得られなかった貴重な情報が手に入ることになる。

色彩について、Koch (1952) 自身は、「色つきの絵も面白いであろうが、色彩を考慮するとなると、必要な色を全部準備することは難しいので、このテスト（バウムテストのこと）では色を用いないことにした」と述べている。ただし、バウムテストではないが、Buck の考案した H-T-P Technique（三枚の画用紙それぞれに No. 2 の鉛筆で家屋・樹木・人物を描かせるもの）に関して、Payne は 1946 年から色彩を導入しているとのことである (Buck, 1948)。そして、Buck 自身も、この Payne の研究に刺激されて、赤・青・緑・黄・橙・紫・茶・黒という八つの色を用いた H-T-P を行っている (Buck, 1948)。なお、学校心理学者の Jolles (1971) も、Buck の H-T-P Technique についての解釈マニュアルの中で、鉛筆描画による無色彩段階 (achromatic phase) とクレヨン描画による色彩段階 (chromatic phase) の二つを設けている。

ところで、筆者自身は広島大学医学部の精神神経医学教室に研究生で在籍していた 1970 年当時、たまたまある雑誌に載っていた Fodor と Kendel (1966) の論文「精神病患者における黒色樹木画と色彩樹木画の比較的观察」を読み、それ以後、心理臨床場面では彼らにならって、鉛筆による黒色バウムと色鉛筆による色彩バウムとを併用するようになった。そして、バウムテストに関心を持っていた精神科医を誘って、予備的な調査もいくつか試みた (名島・増田ら, 1974: 増田・名島, 1974)。

色彩バウムの導入は、人格診断面のみでなく、臨床面においても重要な貢献をなすことが少なからずあった。例えば、面接場面では言語的応答が極端に少なく、また黒色バウムもきわめて貧困で、一見感情閉塞のように見える人に色彩バウムを描いてもらおうと、バウムの内容が豊かになり、色彩も 4 色使用していたりする。このことは、外界（他者）からの情緒刺激に対する応答可能性が高いことを意味しており、治療者側の援助意欲を活性化するものであった。

本稿では、黒色バウム（鉛筆バウム）と色彩バウムの組み合わせによるバウムテストを仮に「黒一色彩バウム二枚法」と名づけ、筆者のこれまでの 25 年以上にわたる臨床経験をもとに、このテストの意義と施行上の留意点を吟味してみたい。

## II 黒一色彩バウム二枚法のやり方

### 1 色鉛筆

前述の Fodor と Kendel は赤・青・緑・黄・茶・紫という 6 色を用いている。これに対して筆者は、赤 (red)・青 (blue)・緑 (green)・黄緑 (yellow green)・黄 (yellow)・茶 (brown)・紫 (purple)・橙 (orange)・桃 (pink)・水 (light blue)・黒 (black)・白 (white) という 12 色の色鉛筆を用いている。白色は単独使用ではまったく目立たない色なのであるが、黒色の上から塗りつけることによって多少とも灰色がかった効果を出すことができる。もっとも、白色が使われることは稀である。12 という本数は、市販の色鉛筆の本数がたまたま 12 色であったということもあるが、もう一つは、Fodor らの 6 色のみでは色の数が不足しているように筆者には思えたからである。色鉛

筆は水彩絵具のように混合して新しい色を作ることができないので、6色では少なすぎる。そこで、実際に12色でやってみると、予期しない効果もいくつかでてきた。それらは、具体的には、以下のようなものである。

(1) 色の本数が多いので、被検者によれば微妙な色調を表現することが可能となる。つまり、被検者の感情・情緒のこまやかさがより表出されやすくなる。また、被検者によれば、躁状態がより表現されやすくなる。色を最大限に使用した場合、Fodorらの6色と筆者の12色では2倍の違いがある。実際、11色使用して色彩バウムを描いた30代半ばの被検者（多弁多動・誇大妄想）がいた。

(2) 12色の中には黒色も入っているので、被検者の中には色彩バウムを黒のみで描く人がいる。これはつまり、鉛筆のみによる黒色バウムと同じになる。このことは、ロールシャッハテストにおける解釈用語を借りれば、色彩回避（color avoidance）（Ainsworth & Klopfer, 1954）の現象を示している。色彩回避は情緒刺激を回避する傾向（情緒的挑戦を含む場面から撤退したい願望）を意味している。ちなみに、色彩回避ではなくて、色彩が使用されている場合の黒色、例えば、木の幹を茶色に塗って、その上に黒色で影がつけられているような場合の黒色は不安や抑うつ感の存在を意味していることが多い。[後になって知ったが、Jolles (1971) は、クレヨンを用いたH-T-Pテストの解釈マニュアルのT (tree) の箇所で、鉛筆描画と同じ黒色のみの使用は、「精神遅滞においては比較的普通、よくても浅薄な情緒傾向 (shallow emotional tone) を示す。不安を伴った敵意を示す可能性あり」という興味深い見解を述べている。]

## 2 黒色バウムと色彩バウムの組み合わせ

実際の臨床場面では、筆者は必ず黒色バウムと色彩バウムを組み合わせで施行している。つまり、バウム二枚法を用いている。描く順序は、まず黒色バウム、次に色彩バウムである。疲れているからということで最初の黒色バウムを拒否した人は何人もいるが、黒色バウムを描いた後に色彩バウムを拒否した人は、筆者の経験ではこれまでごくわずかしかない。この黒一色彩バウム二枚法の具体的なやり方は、以下のようなものである。

(1) まずA4の白い紙を使って、HBの鉛筆で黒色バウムを描いてもらう。ケシゴムも用意しておく。教示は、「実のなる木の絵を描いて下さい。ただし、ヤシとバナナは避けて下さい」である。そのさい、A4の用紙は縦長の方向で描いてもらうようにしている。被検者の中には用紙を横長にして描こうとする人もいるが、筆者はその時には介入して縦の方向で描いてもらうようにしている。これは、次の色彩バウムも同様である。用紙の方向を被検者任せにしておくと、例えば黒色バウムは縦の方向で描き、次の色彩バウムは横の方向で描いたりする。しかし、一方が縦で一方が横になっていると、バウム空間の比較が困難になる。なお、4BではなくてHBの鉛筆を用いているのは、HBなら身近にあるということと、4Bでは濃さと潤いがありすぎてべとつくような感じがするからである。4Bではまた、潤筆と渴筆の区別がつきにくい場合がある。

(2) 黒色バウムが終了したら、用紙の裏側に、①施行年月日、②被検者の名前と生年月日、③ストップウォッチで計った描画所要時間、④被検者から聞いた黒色バウムの名前、⑤その黒色バウムについての被検者自身の印象、⑥黒色バウムの描き順などを鉛筆で書き入れる。

(3) 次に、机の上から被検者が今使用した鉛筆と被検者が描いた黒色バウムを取り去って、A4の白い紙に前述の12色の色鉛筆で実のなる木の絵を描いてもらう。そのさいの教示は、「今度はここにある色鉛筆を使って、やはり実のなる木の絵を描いて下さい。ヤシとバナナは避けて下さい。実のなる木はさっきと同じでも違った木でもかまいません。あなたの思うように描いて下さ

い。色はどれを何色使ってもかまいません」である。なお、ここで机の上から鉛筆を取り去るのは、鉛筆を置いたままにしておくと、色鉛筆以外にこの鉛筆も使用して色彩バウムを描く被検者がいたり、まず鉛筆でバウムを描いておいて次に色鉛筆で彩色していく被検者がいたりするからである。

(4) 被検者が色彩バウムを描き終わったら、黒色バウムと同様、施行年月日、被検者名、生年月日、描写に要した時間、色彩バウムの名前と印象、色彩バウムの描き順などを用紙の裏側に書いておく。[黒色バウム・色彩バウム共にそうであるが、バウムの名前は被検者が答えた通りに記録しておく。「リンゴ」「柿の木」などの他、「金のなる木」「空想の木」「何かよく分からない木」「何でもない木」など、被検者が言ったままに書いておく。]

### Ⅲ 黒－色彩バウム二枚法の解釈

色彩バウムといっても、バウムそれ自体の解釈は黒色バウムと同じである。最も重要なのは、黒色バウムと色彩バウムの比較である。以下、以前のわれわれの研究結果も交えながら、解釈上の留意点について述べてみたい。

#### 1 色の使用数

まず、色彩バウムで使用された色の本数に注目する。分裂病者を対象にした研究（名島・増田ら、1974）によれば、色の使用数が多くなればなるほど外界からの情緒刺激に対する応答性は高くなる[多色群と少色群を比較すると、多色群の方がロールシャッハテストの $\Sigma C(FC+CF+C)$ が高くなる]。なお、正常群 30 名と分裂病群 41 名を比較した別の研究（増田・名島、1974）によれば、色の使用数は、正常群（平均 4.3 色）の方が分裂病群(3.6 色) よりも有意に多い( $t=2.073$ ,  $p<0.05$ )。ただし、ちらばりをみた場合、正常群では 3-5 色の範囲にまとまるが、分裂病群では 1-9 色と範囲が広がる。[前出の Jolles (1971) によれば、色の使用は、「2 色以下ないし 4 色以上でなければ適切な使い方。5 色ないしそれ以上が使用されている場合には、被検者は(感情面で)高度に不安定(labile)。例外は、被検者が秋の色合いの変化を表現するために色を現実に沿って混ぜ合わせている場合で、このような色彩の使い方は成熟した情緒(mature affect)を示す」とされている。]

#### 2 色の使い方

(1) 色彩と精神状態との対応性：一般的に言って、明るい色や暖色は明るい気分と、暗い色や寒色は陰鬱な気分と対応している。

明るい・暗いは色の組み合わせにもよる。木の幹と枝を同じく茶色に塗っていたとしても、緑の樹冠と黄緑の樹冠とでは、後者の色彩バウム(茶と黄緑)の方がより明るい。

色彩と精神状態との対応性についてはしかし、非常に微妙なところがある。例えば、色彩バウムにおける黒色(場合によれば青色)の影は抑うつ感の存在を示すことが多いのであるが、逆に、抑うつ感があれば必ず黒色が使用されるとは限らない。ある 20 代半ばの男性クライアントは、失恋の痛手によっていわゆる「荒れた」状態となった。時折の破壊的行動、飲酒、自殺企図などがあった。気分的には沈んだ状態が続いていた。バウムテストと同時に施行した Zung 抑うつ性尺度(SDS)の得点は 57 点であった。これは、うつ病群の男子の平均得点である 59.88(福田・小林、

1973)に近い。しかしながら、このクライアントの色彩バウムは、緑(樹冠)と茶(幹)の2色であった。つまり、ここでは、クライアントの抑うつ感は黒色では表現されず、その代わりに、2色という色の少なさに表現されていたのである。[クライアントの色彩バウムの樹冠部は袋状に垂れ下がっていた。これは、クライアントの不決断さや、気分ひきずられる傾向性を意味している。]

(2) 逸脱色：色の使い方の中には、「はずれた」使い方がある。筆者は以前、赤い幹、ピンク色の葉、紫の実といった具合に、自然に照応した色から逸脱した色の使い方を逸脱色と名づけた。逸脱色は、「幹および枝に茶系統の色が使用されていないこと。葉に緑系統の色が使用されていないこと。実に黄・赤系統の色が使用されていないこと」が条件となる。この逸脱色は、分裂病患者(47名)では32%に出現する(名島・増田ら, 1974)。これに対して正常者(30名)では、わずか2%である(増田・名島, 1974)。

逸脱色群と自然色群とを分裂病患者内で比較すると、逸脱色群では現実吟味力が低下する傾向がある(ロールシャッハテストのF+%の項目にU検定で1%水準の有意差あり：名島・増田ら, 1974)。つまり、逸脱色を用いる被検者では対象を正確に認知・判断する現実吟味力が低下しており、このことはまた、情緒的統制(emotional control)の悪さを推測させる。なお、正常・分裂病群共に、茶色(木の幹と枝)・緑色(葉)・橙色(木の実)の三つが最も多用される(増田・名島, 1974)。これらはいずれも、自然に沿った色の使い方である。[逸脱色とIQ(ここでは田中・ビネー知能検査による知能指数)との関係を見た場合、分裂病を中心とするさまざまな精神疾患患者(57名)においては、IQが低下するに従って逸脱色を用いる人の割合が増加する(名島, 1975)。具体的に言えば、IQが70台(色彩バウムに対して平均2.7色使用)では逸脱色の出現率は28.6%, 60台(平均3.0色)では38.5%, 50台(平均3.4色)では66.7%, 40台(平均2.2色)では91.7%となり、IQが30台(全員1色のみ)では100%の出現率となる。つまり、IQが30台になると、茶色以外の色、例えば赤や黄、黒などのどれか1色のみで色彩バウムが描かれる。(この調査は予備的なもので、被検者数が少ない。特にIQが30台の被検者は5人であった。もう少し被検者の数を増やさないと断定的なことは言えないが、しかし、少なくとも、IQが低下するに従って逸脱色を用いる人の割合が増加するとは言えよう。)]

(3) 色彩バウムの実例：ここで色彩バウムの詳しい具体例を挙げたい。名島・増田(1993)は、妄想型分裂病で入院中の40代前半の男性クライアントの色彩バウムの変化と病状の変化との対応性を吟味した。実際には黒色バウムとの二枚法でやっているが、ここでは記述の都合上色彩バウムのみについて述べる。

クライアントの最初の色彩バウムは「何の木ということはない」(クライアントの言葉)というものである。このバウムは、パニック状態、つまり地球が爆発するような感じがして全裸になって暴れたり、煙草の火を自分の左手の甲に押しつけるといった状態が収まってしばらく後に描いたものである。使用された色は、自然色ではあるが、緑(葉)と茶(幹の輪郭線と枝の輪郭線)の2色のみである(外界からの情緒的刺激に対する応答性の低下)。バウムは内部が空白の幹で(自己を取り巻く環境からの撤退)、幹の基線は斜めに傾いている(安定性の低下)。そのうえ、幹の先端は大きく左右に裂け(自我の分裂)、枝は合計4本しかない。非常に貧しい内容のバウムであるが、三枚の緑色の葉がかすかな潤いを与えている。もっとも、これら三枚の葉の形はめったに見かけることのない星形(☆)であり、現実からの距離の遠さをうかがわせる。病棟内でのクライアントは自閉的で、カウンセラー(筆者)以外の人とは口もきかない。[星型の葉という色彩バウムは、筆者はこれまで数例経験しているが、いずれも分裂病ならびに分裂病圏であった。]

二番目の色彩バウムは、最初のバウムの約2カ月後に描いた「いちじく」。左下方向に垂れ下がった枝や、幹の斜めの基線から退避的傾向・自己不全感・不活発さなどがうかがえるが、一番目のバウムに比べると、普通の形をした葉（長円形）も増え、実もなり、枝も細かく分岐している。色も、赤と黄（実）、緑（葉）、茶（幹と枝）の4色が使用されている。このように、外界からの情緒刺激に対する応答性が増大している。病棟内でのクライアントは落ち着いた態度で、わずかなではあるが他の患者さんとの交流もみられる。

三番目のバウムは、二番目のバウムの約9カ月後に描いた「ビワ」。クライアントの関係妄想が活発化し、セックスにまつわる異様な気分が出現しはじめた時期である。このバウムは、最初のバウムほどではないが、二番目のバウムよりも貧困化し、退行所見（樹冠部に比べて長い幹）も見られる。色は、黄・茶・紫の3色が使用されている。たくさんの円形の実と数枚の長円形の葉があるが、実や葉のいくつかは紫である。紫色の葉は逸脱色であり、クライアントの現実吟味力の低下を意味する。これは、クライアントの関係妄想の活発化と対応しよう。

### 3 黒色バウムと色彩バウムの比較

二枚のバウムを比較する場合、(1) 黒色バウムに比べて色彩バウムのバウム空間はどうなっているか、(2) 黒色バウムに比べて色彩バウムの内容の豊かさはどうなっているか、(3) 黒色バウムに比べて色彩バウムのバランスはどうなっているか、という三つの点に留意する。

(1)のバウム空間というのは、A4の白紙の中でバウムが占めている空間（面積）のことで、バウムの大きさといってもよい。①黒色バウムよりも色彩バウムが大きい場合、②黒色バウムと色彩バウムがほぼ同じ場合、③黒色バウムよりも色彩バウムの方が小さい場合という三つのケースがある。

(2)のバウムの内容の豊かさというのは、バウムの枝の分岐の仕方や葉の茂り方、実のなり方などの豊かさの度合いのことである。いわゆる「貧弱なバウム」「豊かなバウム」といった言い方をする場合の豊かさの程度を指している。最も貧弱なバウムは、葉も実も樹冠も根もなく、幹とわずかな枝のみが描かれているようなバウムである。(1)と同様、①黒色バウムよりも色彩バウムの方が豊かになっている場合、②黒色バウムと色彩バウムの豊かさの度合いが同じ場合、③黒色バウムよりも色彩バウムの方が貧弱になっている場合という三つのケースがある。

病院臨床の場では、バウムの内容の中に退行所見が見られることが多い。退行所見は一線枝・一線幹が代表的なものであり、分裂病や分裂病質、知的障害などによく出現する。退行所見が出現した場合、それがどちらのバウムであるかに留意する。例えば、最初の黒色バウムに一線枝が見られるが、次の色彩バウムになるとそれが二線枝に変わっているような場合、これは、色彩の導入によって被検者の心がいわば前向きになっているのであるから心理療法（心理的働きかけ）の適用可能性が高くなる。逆の場合には少しむづかしくなるので治療上の工夫が必要となる。

例えば、ある20代後半の男性（大卒、無職、心的外傷体験による強度の警戒心と引きこもり、緘黙傾向）との初回面接における色彩バウムは、バウム空間が黒色バウムよりも約1/3に縮小し、さらに、5本の枝はすべて1本線（茶色）であった（黒色バウムの枝は2本線）。最初、父親に連れられてやってきたクライアントと1対1で面接すると、彼は険しい顔つきで、「あー」とか「うー」といった短い応答や、何か意味不明の言葉をもごもごと呟くばかりであった。このように、通常の言語的コミュニケーションは非常に困難であった。そして、クライアントは、その後長い間治療者の許にやって来なかった。[この事例では、当初月1回のペースでクライアントの父親に対するコンサルテーションのみを行っていたが、12回目から筆者のアドバイスに従った父親の誘

いによって、やっとクライアントが父親と一緒に継続的にやって来れるようになった。それ以後、クライアントの両親をも交えた月に1回の合同面接を重ねることによって、徐々にクライアントのコミュニケーション能力は回復し、17回目（クライアントが継続的にやって来るようになってから6回目）からは時折笑顔も見られるようになった。]

(3)のバウムのバランスというのは、バウムの均衡のことである。つまり、幹や枝、根の張り方といったバウム全体の均衡がどの程度うまくとれているかの度合いのことである。例えば、「大きい樹冠部に比べて幹が細すぎるバウム」「枝が豊かに絡みあっているバウムの右半分に比べると、左半分の枝がまばらにしか描かれてないバウム」などはバランスが取れていないと言える。(1)

(2)と同様、①黒色バウムよりも色彩バウムの方がバウム全体のバランスがよくなっている場合、②黒色バウムと色彩バウムのそれぞれのバランスが同じ程度の場合、③黒色バウムよりも色彩バウムの方がバランスが悪くなっている場合という三つのケースがある。

バウム空間は別として、内容の豊かさ・バランスというこれら二つのカテゴリーの吟味は、いわば、ロールシャッハテストの用語を借りれば、形態水準評定(form level rating)に相当するものである。片口法の形態水準評定では、個々のロールシャッハ反応を+・±・-の四つの段階に評定する(片口, 1987)。これにならって、黒色バウムと色彩バウムのそれぞれをこれら二つのカテゴリーごとに4段階に評定して、黒色バウムと色彩バウムとを比較検討してみるのもよいであろう。

一般的に言えば、黒色バウムよりも色彩バウムにおいて二つのカテゴリーの形態水準が良くなれば、その被検者の情緒刺激の処理の仕方は良好と言えよう。もちろん、その場合、その被検者の色彩バウムの色の本数や色の使い方も同時に考慮しなければならないのであるが、逆に、色彩が導入されたことによってバウム空間が極度に縮小したり、バウムの内容が貧困化したり、バウムのバランスが著しく崩れるようであれば、これは色彩ショック(color shock)と呼んでもよい。

ここで、具体例を挙げて、黒色バウムと色彩バウムの対比について述べてみたい。バウム空間の縮小という色彩ショックの1例である。クライアントは高校3年の男子生徒。登校拒否。第1反抗期も第2反抗期もないおとなしい性格。登校拒否といっても、典型的な神経症的登校拒否(neurotic school refusal)のような閉じこもりは見られない。家では家人の手伝いもするし、冗談も言うし、外出すると近所の人に挨拶もする。家庭内暴力や昼夜逆転の現象もない。日中はテレビを見たりパソコンのゲームをしたりといった生活。「学校には行きたいが、やる気が出ない」(クライアントの言葉)といった状態。これは、登校拒否の中でも近年注目されているアパシー型(apathy type)の登校拒否である。アパシー型は、男子に圧倒的に多く見られ、選択的無気力(勉強意欲のみ喪失)や人生の目的喪失を特徴とする(笠原, 1984)。彼らの無気力状態はメリハリがなく、ダラダラと長期間続くことが多い。

このクライアントの黒色バウムは「栗の木」。神経症的登校拒否のバウムは画面の左上隅や中央下部に小さく描かれることが多いが、このクライアントの場合、A4の白紙一杯にバウムが描かれている。栗の実も19ケなっている。木の大きさに比べて細長い幹が特徴的。次の色彩バウムは「ミカン」。色は、黄(12ケの実)・緑(ミカンのヘタと葉)・茶(枝と幹)・黄緑(葉)の4色(自然色)である。二つのバウムを比べた場合、内容の豊かさとバランスはほぼ同じである。筆圧は、黒色バウム・色彩バウム共に弱い。ただし、どちらも実の筆圧は強い。また、どちらのバウムも地平線が根元より高く引かれている(孤立し、見捨てられていると感じている)。[実の数の多さや実の部分の筆圧の強さは、クライアントの要求水準の高さ(理想の高さ)を示している。実

際、このクライアントが登校意欲をなくした遠因は、自分の学力に及ばないある進学校を強く望んだことにあった。高校受験時、クライアントは担任からその進学校への受験を拒否されたのである。]

二つのバウムの違いは、バウムの大きさにある。黒色バウムに比べて色彩バウムは約半分の大きさである。バウムの樹形はほぼ同一なので(主枝も6本と同じ)、結局のところ、黒色バウムをそのまま半分に縮めると色彩バウムになる。

クライアントの色彩バウムの色は4色なので、外界に対する感情的応答性は十分にある。また、自然色なので現実吟味力の障害は見られない。葉の描き方からは、繊細さもうかがえる。問題はバウム空間の縮小にある。つまり、色彩が導入されることによって、クライアントの心理的生活空間は縮小している。対人関係という外界からの刺激(おそらく家族)によってクライアントは圧迫され、自己不全感を抱いているものと思われる。

#### 4 二つのバウムの比較に関するその他の留意点

上の節で、バウム空間・内容の豊かさ・バランスという三つの比較項目について述べたが、ここでは補足としてその他の留意点について二、三述べたい。

(1) 黒色バウムと色彩バウムがほぼ同じように見えたとしても、よく観察するとバウムの形態に微妙な違いが存在することがある。解釈のさいには、色彩のみでなく、そのような形態の違いにも留意することが大切である。例えば、大学7年目のあるスチューデント・アパシー(同一性拡散による長期留年)の男子大学生のバウムは、三つの比較項目はほぼ同一であった。しかし、黒色バウムでは管状枝(不決断・目標設定の不安定さ)であったのが、色彩バウムになると枝の先端は閉じられ、枝の途中にソーセージのようなふくらみが見られた。つまり、このクライアントにあっては、自由な感情の発露が禁止されていることがうかがえる。これは、色彩バウムの茶色の幹に黒と紫の影(抑うつ感)が描かれていることと対応しよう。

形態の相違は、どちらか一方の欠如でもある。例えば、黒色バウムの幹に過去の心的外傷体験の存在を意味する①幹の表面の傷、②枝の切り口、③瘤状の瘢痕、④幹の切断などが見られたら、それらが色彩バウムでは消失するか否かに留意する。[もし色彩バウムにおいて心的外傷体験のサインが消失し、さらに、明色が使用されていれば良徴である。]

(2) 一般に正常適応者のバウムは変化しにくいだが、精神障害者の場合、短時日のうちに変わることが少なくない。例えばバウム空間も、ある時には黒色バウムの方が大きく、別な時には色彩バウムの方が大きかったりする。したがって、バウムテストはある程度の期間をおいて再テストすることが大切となる。例えば、IQが54の、ある30代半ばの男性。被害妄想(暴力団につけ狙われている)とそれに起因するおびえが活発な頃のバウムは、二つのバウム共に内容は貧弱で、色彩バウムは紫の1色のみ。バウム空間も色彩バウムの方が縮小している。しかし、面接での話し合い(知的な劣等感や他人から馬鹿にされた思い出など)と薬物療法によって、約3ヶ月後のクライアントのバウムは変化した。色彩バウムにおけるバウム空間は増大し、色彩も、紫色の枝と幹以外に黄緑の葉(前回は紫の葉)が出現したのである。自我萎縮(細すぎる幹)や硬い紋切り型の思考様式(規則正しく配列された葉)は以前と変化しないものの、外界への穏やかな情緒的関わりが芽生えはじめているのがよく分かる。



#### IV 治療的活用

黒一色彩バウムテストは他の人格検査と同様、クライアントのパーソナリティの診断や心理療法の治療効果の測定に役立つものである。また、バウムテストの結果をクライアントに適切にフィードバックすれば、それは有益な治療的介入となろう。

心理テストは何よりもクライアント自身の役に立つものでなければならない。筆者自身はバウムテストを行う場合、結果をフィードバックするということを前提としてクライアントにテスト依頼をしている。つまり、テスト後にテスト結果を伝達するということをテスト前にクライアントに口頭で伝えてテスト依頼をしている。そして、例外はあるにせよ、バウムテストが終了すると、原則としてその場で直接テスト結果をクライアントに述べるようにしている。その場合、クライアントの問題点のみでなく、クライアントが有している潜在的な長所（可能性）をも同時に指摘するようにしている。

黒一色彩バウム二枚法についての経験を積んでくると、クライアントの持ついろいろな側面が見えてくる。その中でも、クライアント自身が気づいていないような長所を指摘してあげると、沈んでいたクライアントの目が一瞬輝いたりする。テスト結果のフィードバックによってクライアントの自己尊敬（self-esteem）が高まることこそ、テスト本来の機能ではないかと思える。

#### V テストバッテリーの問題

これまで述べてきたように、黒一色彩バウム二枚法は、黒色バウム一枚法よりも優れていると思えるが、もちろん問題点はある。それは、バウム二枚法だけではクライアントの対人関係や対象関係その他に関する十分な情報が得られないことである。そこで、テストバッテリーが重要となる。

筆者自身は十分な時間的余裕がある時にはロールシャッハテストやTATを施行するが、あまり時間がなくてとりあえずクライアントに関する大まかな見当づけを行いたい時には、例えば、①黒一色彩バウム二枚法、②TEG(東大式エゴグラム)、③真珠取りといった組み合わせを用いている。これら三つのものをすべてやっても、ほとんどの事例において1時間以内に終了する。ただし、テスト結果を媒介にしてクライアントの自己理解を深めるための話し合い（治療面接）を行うとすれば、時間は当然長くなる。例えば、「真珠取り」は、施行そのものは1分もかからないが、得られた答をもとにクライアントの対人関係の様態について話し合っていけば、少なくとも1時間は必要となる。[真珠取りというのは、筆者が考案したもので、「あなたは今、海底にいて真珠を取っています。海の上の小舟には空気ポンプがあり、そこから絶えず空気があなたに送られています。空気ポンプを押しつづけていないと、あなたは窒息してしまいます。あなたは、小舟の上で空気ポンプを押す人を誰にしますか」という質問をクライアントに行うものである。これは、クライアントにとっての重要な人物（a significant person）を知るための質問である。答が得られたら、クライアントがその人物を選択した理由も問う。]

## VI おわりに

投影法の中でもバウムテストは、施行が簡単で、(細部まで時間をかけてきっちりと描くという強迫的な性格の持主以外は)一般に短時間で終了する。しかも、クライアントに対する侵襲性は低く、含まれる情報量は豊かである。年齢的にも幼児期から可能である。そのため、バウムテストは数多くの相談機関で用いられており、バウムテストについての研究論文も数多い。適用対象も、分裂病、うつ病、非行、登校拒否、薬物依存、摂食障害、各種の神経症などさまざまである。[日本における研究論文については、名島・増田(1993)の展望論文の末尾にある引用文献欄を参照されたい。これまで約90ばかりの研究論文が書かれている。]

筆者は本稿において、これまで日本では本格的に論じられたことのない色彩バウムを取り上げ、黒一色彩バウム二枚法を行うさいの留意点や解釈上の留意点について詳述した。バウムテストに色彩を導入し、さらに、この色彩バウムを黒色バウムと比較することによって、特にクライアントの感情・情緒面の情報が得られやすくなる。具体的に言えば、色の使用数によって、対人関係という外界からの情緒刺激に対する感情応答性のおおまかな量が推定でき、色の使い方によって感情のこまやかさが推定できよう。[ただし、逸脱色を使用した場合には、現実吟味力の低下がうかがえる。]そして、黒色バウムと色彩バウムを比較することによって、情緒刺激の処理の仕方、すなわち、情緒刺激を能動的・統合的に取り入れるか、逆に情緒刺激によってパーソナリティの統合性や内的秩序の平衡が乱されるかといったその人特有のパターンが把握できよう。

## 引用文献

- Ainsworth, M. D. & Klopfer, B. 1954 Sequence analysis. In Klopfer, B., Ainsworth, M. D., Klopfer, W. G. & Holt, R. R. Developments in the Rorschach Technique. Vol. 1. Technique and Theory. New York: Harcourt, Brace & World. Pp. 317-351.
- Buck, J. N. 1948 The H-T-P Technique: A qualitative and quantitative scoring manual. Journal of Clinical Psychology, Monograph Supplement No. 5. Vermont: Brandon. 加藤孝正・荻野恒一訳 1982 HTP 診断法 新曜社
- Fodor, Von S. und Kendel, K. 1966 Vergleichende Beobachtungen von schwarzen und farbigen Baumzeichnungen bei psychotischen Patienten: Ein Beitrag zur objektiven Untersuchung der Affektivität bei Psychotikern. Schweizer Archiv für Neurologie, Neurochirurgie und Psychiatrie, 97, 361-386.
- 福田一彦・小林重雄 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, 75, 673-679.
- 林 勝造・国吉政一・一谷 彊 1970 補遺 日本におけるバウム・テストの研究 林 勝造・国吉政一・一谷 彊訳 バウム・テスト 日本文化科学社 Pp. 111-150.
- Jolles, I. 1971 A Catalog for the Qualitative Interpretation of the House-Tree-Person (H-T-P). Revised Edition. Los Angeles: Western Psychological Services.
- 笠原 嘉 1984 アパシー・シンドローム 岩波書店
- 片口安史 1987 改訂 新・心理診断法 金子書房
- Koch, K. 1949 Der Baumtest: Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel. Bern: Hans Huber.
- Koch, C. 1952 The Tree Test: The tree-drawing test as an aid in psychodiagnosis. Bern: Hans Huber. 林 勝造・国吉政一・一谷 彊訳 1970 バウム・テスト—樹木画による性格診断法 日本文化科学社
- 増田勝幸・名島潤慈 1974 色彩バウムに関する研究—正常者と分裂病者の比較— 第27回広島医学会総会発表資料 (広島医学, 1975, 28: 8, 918-919 に所収)

- 三上直子 1995 S-HTP 法－統合型 HTP 法の臨床的・発達のアプローチ 誠信書房
- 名島潤慈 1975 色彩バウムテストにおける逸脱色と知能指数との関係 未発表資料
- 名島潤慈・増田勝幸・増田徳幸・増田文枝 1974 色彩 Baumtest に関する研究(1) ロールシャッハ・テストとの関連性 第 25 回中国四国精神神経学会発表資料
- 名島潤慈・増田勝幸 1993 バウム・テスト 上里一郎監修 心理アセスメントハンドブック 西村書店 pp. 223-238.